

## I 業務の内容

### 1. 業務題目

文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業「文化芸術を通じた社会包摂のための事業評価ハンドブックの作成」に関する業務

### 2. 業務の目的

令和元年度に文化庁と九州大学が共同で作成した『評価からみる“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』は、社会包摂を意識した文化事業の評価に関する「基本的な考え方」を示しており、評価に関する理解を深める上で有益なものである。しかし、実際に事業評価をする際、何をどのような手順で進めていけばいいのかという具体的な記載がない。

そこで令和2年度には、より実践的で、具体的な手順がわかるようなハンドブックを作成することを目的とした。ただし、どの事業現場にも共通する評価方法や指標は存在し得ないことを踏まえ、ユニバーサルな評価指標を示すのではなく、事業実施者が参考にすることができる複数の評価モデルと、事業に適した評価方法を見出していくプロセスを提示することを目指した。

## II. 業務の実績

### 1. 業務の実施日程（説明は次項）

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①実行委員会						←						→
②有識者会議									←→			
③アートミーツケア学会での意見聴取								↔				
④ハンドブック原稿執筆									←→		→	
⑤ハンドブックデザイン									←→		→	
⑥ハンドブック納品・配布												↔

### 2. 業務の実績の説明

#### ①実行委員会

実行委員会を3回実施し、インタビュー調査の報告やハンドブックの作成方針・内容・デザイン等の検討を行った[第1回：9月23日(水) 13:00～16:00、第2回：11月2日(月) 14:00～17:00、第3回：12月25日(金) 13:00～16:00]。これに加え、1月以降には、原稿の確認やレイアウト等の検討会を4回実施した[1月29日(金) 10:00～12:00、2月10日(水) 16:00～18:00、2月22日(月) 13:00～15:00、3月3日(水) 13:00～15:00]。さらに、各実行委員間で執筆やデザインに関する詳細の打ち合わせを随時実施した。いずれの会議もZoomを用いたオンラインでの開催。会議後には議事録を作成し、次回までの作業課題を明確にすることで、ハンドブックの内容の充実化を図った。

#### ②有識者会議

有識者会議を2回実施した[第1回：12月3日(木) 17:00～19:00、第2回：1月6日(水) 15:00～17:00]。当初予定よりも事業開始が遅くなったため、有識者会議の日程が予定よりも遅くなったが、結

果的に、内容に関する実質的なアドバイスをしていただくことができ、効果的に機能した。会議後にも、有識者委員からはメールで補足アドバイスをいただいたほか、ハンドブックの内容に関するチェックも丁寧に行っていた。

### ③アートミーツケア学会での意見聴取

アートミーツケア学会大会（オンライン開催）において、シンポジウム「価値を引き出す評価のやり方」を実施し、原稿執筆を担当する実行委員4名が原稿の構想発表を行った（11月21日（土）15:50～17:20）。シンポジウムでは、アートと福祉が重なり合う現場で活動をされているゲスト2名からコメントをいただき、意見のやり取りをしたほか、別途設けられた「振り返り」の時間でフロア参加者とも意見交換を行った。ここでのやり取りを参考にしながら、担当者は原稿の執筆に取り掛かった。

### ④ハンドブック原稿執筆

12月から2月にかけて、原稿執筆担当者は原稿を執筆した。有識者会議、実行委員会での検討を複数回行いながら、他の委員からの意見を踏まえ、よりよい内容へと仕上げていった。ケーススタディについては、必要に応じてフォローアップ調査を実施した。

### ⑤ハンドブックデザイン

初学者にも理解しやすく、また実践に生かせる内容にするため、教材作成の経験が豊かな編集経験者にも加わっていただき、これまでにはなかったワークシートの作成や導入漫画、キャラクター同士の対話によるワンポイント・アドバイスなど、新たな工夫を随所に散りばめた。昨年度までと同様、イラストや図表、レイアウトにも工夫を凝らした。

### ⑥ハンドブック納品・配布

予定どおりに納品され、行政、文化団体、大学、関係各所などに送付したほか、ウェブサイトにもPDF版を掲載し、SNSなどで大々的に広報を行った。

## III. 成果物

『やってみよう！評価でひらく“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』

編 文化庁×九州大学 共同研究チーム（研究代表者 中村美亜）

執筆 中村美亜、長津結一郎、村谷つかさ、南田明美、NPO 法人ドネルモ

編集 NPO 法人ドネルモ

デザイン 長末香織

発行 九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ

出版年月日 2021/03/25 | A5 並製・84 ページ



#### ■冊子版

添付

#### ■PDF版ダウンロードページ

[http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/publication/sal\\_handbook\\_2020/](http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/publication/sal_handbook_2020/)

#### IV. 総括

本研究の目的は、社会包摂につながる文化芸術活動の評価について、昨年度刊行したハンドブックよりも実践的で、具体的な手順がわかるようなハンドブックを作成することであった。今回のハンドブックでは、事業実施者が参考にすることができる複数の評価モデルと、事業に適した評価方法を見出していくプロセスを提示することを目指し、ハンドブックの編集を行った。

実行委員会では、インタビュー調査やハンドブックの内容検討を、有識者会議では、文化事業の評価を取り巻く現状と課題の共有、ハンドブックの暫定的内容に関する意見交換を行なった。結論としては、文化事業の評価が有意義なものになるかどうかは、評価に「柔軟に」アプローチできるかどうかで決まるといったことだった。一般的な評価のテキストには、最初に事業の目的・目標を定め、それらが達成されたかどうかをチェックする道筋が書かれている。手軽な料理のレシピや組み立て家具のマニュアルのように、説明された手順に従っていきさえすれば、うまくできるかのような印象を与える。

しかし文化事業では、長期的な目的は変わらなくても、短期的な目標は途中で変更されることがある。また、社会包摂につながる芸術活動では、最初に目標設定すること自体が難しい場合も少なくない。こうしたケースでは、事業の目標設定と評価の対象設定を柔軟に調整しながら、事業と評価を進めていくプロセスが必要になってくる。

今回のハンドブックでは、そうした柔軟なプロセスを可視化しようと努めた。特に、全体の構成については、読者のステップアップを意識し、より実践的に取り組めるよう、内容の構造化と整理、よりわかりやすい記述を行うよう取り組んだ。また、ワークシートも作成し、有意義に活用しながら文化事業を行なっている人たちの手順を可視化しようとした。最終的に、文化芸術活動の特性に寄り添った、これまでにないアプローチを示す評価のハンドブックが出来上がった。